

『町』と『館』——ギャヴィン・スティーヴンスについて

石川和代

The Town and The Mansion — On Gavin Stevens

Kazuyo ISHIKAWA

I

The Town (1957) は、William Faulkner の Snopes 三部作の二番目の作品であり、三部作の最初の作品である *The Hamlet* (1940) が出版されてから、17年間という隔たりをおいて書かれたためか、作品の持つ雰囲気は、前作とはかなり異っている。*The Mansion* (1959) は、三部作の三番目の作品であると共に、Faulkner の最後の作品でもある。*The Town* と *The Mansion* は、*The Hamlet* に続いて、Flem Snopes を中心とする Snopes 一族がのし上がっていく過程を描いた物語であると同時に、Eula と娘 Linda にまつわる愛をテーマとした物語であるとも考えられる。この二つの作品を愛の物語として考える時、その中心となって重要な役割を果たすのが、Gavin Stevens である。この小論においては、*The Town* と *The Mansion* の二つの作品の中で、Gavin Stevens が Eula と Linda に傾ける愛に眼を向けながら、Gavin という人物について考えてみたいと思う。

II

The Hamlet において、Hoake McCarron の子を身ごもった Eula は、彼が町から姿を消したため、Flem Snopes と結婚するが、Flem との結婚生活には満足できず、*The Town* においては、町長の Manfred de Spain と姦通を続けているという設定になっている。Eula は、男性なら誰もが心を引かれるタイプの女性であるため、町の他の男性と同じように、Gavin もまた、Eula に強く心を引かれ、彼は Manfred と自分を比較して悩み苦しむのである。その苦悩は次のように描写されている：

...I remember how I could never decide which of the two unbearable was the least unbearable; which (as the poet has it) of the two chewed bitter thumbs was the least bitter for chewing. That is, whether Manfred de Spain had seduced a chaste wife, or had simply been caught up in passing by a rotating nympholept. This was my anguish. If the first was right, what qualities of mere man did Manfred have that I didn't? If the second, what blind outrageous fortune's lightning-bolt was it that struck Manfred de Spain that mightn't, shouldn't, couldn't, anyway didn't, have blasted Gavin Stevens just as well? Or even also

(oh yes, it was that bad once, that comical once) I would even have shared her if I had to, couldn't have had her any other way.

That was when (I mean the thinking why it hadn't been me in Manfred's place to check that glance's idle fateful swing that day whenever that moment had been) I would say that she must be chaste, a wife true and impeachless.¹

これは何年か後に Gavin が過去のことを思い出す場面の一節で、彼は Manfred のことを、うらやましく、また、ねたましく思い、他に彼女を手に入れる方法がなければ、Manfred と彼女を共用しようとすると思ったというのである。ここには、Gavin がどんなに強く Eula に心を引かれていたかが表われているように思われるし、また、彼が、Eula と Manfred の姦通は、あくまでも Manfred が Eula を誘惑したが故に始まったことであり、Eula は貞節な妻であると思おうとしていることがわかる。

シェファソンの町の人々は、二人の姦通を受け入れ、黙認するが、Gavin は、姦通のために Eula が町の他の婦人たちから特別な眼で見られることに我慢ができず、彼女が町の婦人たちに平等に受け入れられることを願う。そのためには、二人の姦通をやめさせなくてはならないと考え、やめさせることが Eula を救うことになると思えるのである。彼のこういった気持は、妹 Maggie から、“You are going to save her.” (T, p. 49)と言われて、彼がすかさず “Yes!” と答え、彼女がすぐに “ —— from Manfred de Spain.” (T, p. 49) とつけ足すのに対して、“You too” と答えていることに、はっきりと表われている。また、妹 Maggie との会話から、Eula が Manfred と姦通しているという事実を、彼が心の中で否定しようとしているのがわかる：

She just talked to Uncle Gavin then: “Just what is it about this that you can't stand? That Mrs. Snopes may not be chaste, or that it looks like she picked Manfred de Spain out to be unchaste with?”

“Yes !” Uncle Gavin said. “I mean no! It's all lies —— gossip. It's all —— ” (T, p. 49)

Eula に心を引かれている Gavin の心の中には、貞節な女性として Eula の理想像が描かれており、彼はそれに反する事実は信じたくないと思うのである。

Eula と Manfred の関係が町の人々の眼にさらされるのを防ごうと考える Gavin は、社交クラブが Eula と夫の Flem にクリスマスの舞踏会の招待状を出すことになると、クラブの委員会に働きかけるよう妹 Maggie に頼んで、Manfred の舞踏会への出席を全面的に阻もうとする。その後、Gavin と Manfred はお互いに張り合ってコミカルな戦いを展開するが、結局、Manfred は舞踏会にやって来る。その場にいた人々があっけにとられて見守る中で、Manfred が突然 Eula と踊り始めると、Gavin は大変な勢いで Manfred につかみかかり、逆になぐられて、顔を血まみれにして倒れるが、勝てないと知りながら、彼は再び Manfred にとびかかる。Gavin のこうした行為について、彼の甥の Charles が語る場面がある：

…When I was older I knew that too : that Uncle Gavin wasn't trying any more to destsoy or even hurt Mr. de Spain because he had already found out by that time that he couldn't. Because now Uncle Gavin was himself again. What he was doing was simply defending for-

ever with his blood the principle that chastity and virtue in women shall be defended whether they exist or not. (*T*, p. 76)

女性の貞節、貞操は、それが存在しようとしまいと守るべきだという原則を、自分の血で守っていたのだというわけである。貞節な女性としての Eula を自分の心の中に描いている Gavin は、彼女の貞節をとりもどしたいとの思いからか、それを奪った Manfred にとびかかったと言える。

この出来事の後、Gavin は、Flem が発電所の真鍮を盗んだ事件に関して告訴を起し、Manfred の保釈金会社を犯罪黙認のかどで訴える。そんなある晩のこと、Eula が自分の身体を Gavin に与えようとの目的で、事務所に一人でいる Gavin のもとを訪れるのである。この時、Gavin は、今まで思いを寄せてきた Eula を目の前にして、彼女の海のように青い眼に心を引かれながら、さあこれからという時に、“Don't touch me!” (*T*, p.93)と一言で拒絶する。それに対して Eula が、“Don't expect. You just are, and you need, and you must, and you do. That's all. Don't waste time expecting.” (*T*, p. 94)と云うと、彼は“…If I had just done that, it might have been me instead of Manfred? But don't you see? Can't you see? I wouldn't have been me then?” (*T*, p. 94)と云って、Eula の申し出をあくまでも拒絶するのである。Eula を Manfred と共用しようと思うほど、Eula に心を引かれている Gavin が彼女の申し出を拒絶するのは、もし彼が彼女と肉体関係を持つならば、彼女の貞節を守るはずの彼自身が彼女の貞節を奪うことになり、まさに、彼が彼ではなくなってしまうからなのである。また、告訴を取り下げてもらおうとの意図で自分の身体を与えようとする Eula と単なる肉体関係を持つことは、Gavin の心の中にある Eula の理想像をくずすことになりかねないが故に、彼は自分の心の中の Eula をいつまでも変わることなく守るために、彼女との肉体関係を拒絶するとも考えられる。その点を考えに入れるならば、Cleanth Brooks の見解は的を得たものと言える：

In short, the courtly or chivalric lover wants something far more ethereal and transcendent than any mere union of the flesh, for his erotic longing is finally lodged in his head and not in his loins. Gavin Stevens, then, proves himself to be the true chivalric lover in refusing such a fleshly consummation when Eula offers herself to him, for Gavin is in love with a dream, a dream, to be sure, that Eula seems to incarnate, but a dream nevertheless, and he refuses to relinquish that dream.²

Gavin は心の中で Eula を理想化し、その理想像を大切にしているのであるから、Brooks の説明する “the courtly or chivalric lover” のように、単なる肉体的結びつきを超越したものを求めていると考えられる。また、Brooks の言う “a dream” は、Gavin の心の中の Eula の理想像をさすと言える。

Brooks は Eula に対する Gavin の愛を、「騎士道的な」愛ととらえたわけであるが、Gavin が愛する Eula を救おうとする行為そのものが、騎士のような行為であるとも考えられる。この点については James H. Farnham もふれており³、作者自身も次のように述べている：“It is the knight that goes out to defend somebody who don't want to be defended and don't need it. But it's a very fine quality in human nature. I hope it will always endure.”⁴ Gavin が Eula を守ろうとする行為は「騎士」の行為であり、それは「人間の性質の中で非常にすばらしい特質」とであると評価しているのである。たしかに、理由が何であれ、相手を守ろうとする行為は、す

ばらしいことであると言わざるを得ない。

このように考えてみると、Gavin が Eula との肉体関係を拒絶したのは、一言で言えば、彼が自分の心の中の Eula の理想像を大切にしようとしたからということなるが、その他に、彼の性格の弱さもあったと言わねばならない。The Mansion において、Linda が Gavin に、どうして Eula と肉体関係を持たなかったのかとたずねると、彼は次のように答えようとする：

“Then maybe it was because I wasn't worthy of her & we both knew it but I thought if we didn't maybe she might always think maybe I might have been”⁵ Gavin は、自分には Manfred のように彼女を満足させる力がないと思い、実際に Eula と肉体関係を持つことによって、それを彼女に知られるのがこわいと考えたのであり、彼は自分自身が傷つくのを恐れたとも言える。ある意味では、彼の性格の弱さが、彼を騎士のような、プラトニックな愛へと導いたと言えるかもしれない。Gavin は Eula の身体を与えようとの申し出は拒絶するが、彼女を愛するが故に、告訴を取り下げてほしいとの彼女の気持をくんで、すんなり告訴を取り下げてしまう。その後、ジェファソンの町にいることに耐えられず、すでにハーヴァード大学を卒業している彼が、さらに法律を勉強するために、ドイツのハイデルベルグ大学へと旅立つのである。

Gavin が Eula の娘 Linda とデートするようになるのは、彼がヨーロッパから帰って来て郡の弁護士になり、Manfred が町長をやめて Sartoris の銀行の頭取になり、Flem がそこの副頭取になってからのことである。35才の Gavin が16才の高校生の Linda とドラッグストアで会い、一緒にアイスクリームを食べながら、彼女に詩の本を読んでやる目的は、妹 Maggie が、“He was just forming her mind: that's all he wanted.” (T, p. 179) と言っているように、Linda の精神の形成であり、彼が彼女の精神を形成しようとするのは、彼女を Snopes 一族から救いたいと考えるからである。Flem に代表される Snopes 一族は、目的のためには手段を選ばず、罪や悪だけでなく、愛情さえも、利用できるものはすべて利用するという、冷酷かつ打算的なやり方でのし上がっていく連中である。それ故、Gavin は、愛する Eula の娘であり、Flem の実の娘ではない Linda が、Snopes 一族の考え方に染まらぬように、彼女の精神の形成につとめるのであり、彼女を Snopes 一族から救うことは、“a privilege, an honor, a pride” (T, p. 182) であると感じるのである。

Gavin は、Linda が Flem のいるジェファソンを離れて、もっと広い外の世界へ出て行くことが、彼女の幸福につながると確信し、彼女が高校卒業後、遠くの大学へ進学することを望む。Gavin が Linda の幸福を願っていることは、“I want her to be happy . Everybody should have the chance to be happy.” (T, p. 199) という彼の言葉にはっきりと表われている。彼は、Linda が進学するとよいと思われる、外国や遠隔地の学校のカatalogやパンフレットが、直接彼女の所に届くように手配するが、彼女は、カatalogを送ってもらった学校のどこへも行けず、ジェファソンの学院へ行くのだと言う。Linda がジェファソンから出ることに反対しているのは Eula であると思い込んだ Gavin は、Eula の所を訪問し、反対しているのが Flem のであることを知らされることになる。これは、Gavin が現実を見逃す傾向があることを示す一例である。別の例としては、Eula が Gavin に告訴を取り下げてほしいと願ったのは、娘 Linda のことを考えてのことであったのに、Gavin が、Manfred か Flem のためであると考えたことがあげられる。Gavin が Eula の所を訪問した折、Linda のために自分にできることは何もないのかとたずねる彼に対して、Linda のために思う彼の気持と彼の誠実な人柄を知った Eula は、Linda と結婚するように勧めるが、この時、Gavin は返事をしないでその場を去ってしまう。Gavin は、親子のように年下の Linda の幸福は願っても、彼女と結婚しようという気持はなか

ったものと考えられる。

Flem が Linda をジェファソンから出したがらないのは、彼女がジェファソンから出て行けば、Eula もまた去ってしまうと推測するからである。彼は、Eula が父親の Will Varner から受け継いだ財産を我が物にしようと策略をめぐらす。彼は Linda の愛情を利用し、Linda が Eula から相続する一切の財産を Flem に与えるという証文を作成させ、また、銀行株を手に入れ、Eula と Manfred の姦通を暴露するという非常手段によって、頭取の地位を一気に Manfred から奪い取ってしまうのである。その結果、Eula と Manfred は駆け落ちせざるを得なくなる。一人残して行く娘 Linda のことを心配する Eula が Gavin の所を訪れて、“Marry her, Gavin” (*T*, p. 332) と 4 回繰り返す、何としても Linda と結婚するように頼むと、Eula の濃い青色の眼を見て、彼女に対する思いをかきたてられ、愛する Eula の頼みであれば受け入れようと思ったのか、彼は次のように答える：

“Then this way. After you're gone, if or when I become convinced that conditions are going to become such that something will have to be done, and nothing else but marrying me can help her, and she will have me, but have me, take me. Not just give up, surrender.” (*T*, pp. 323–333)

Gavin は、自分が Linda と結婚するよりほかに彼女を救う道がなく、彼女にその気があればとの条件つきで同意するのである。本当は結婚する気がなくても、娘を託す相手として Gavin しかないという Eula の状況を考えれば、Eula を愛する Gavin としては、条件つきで同意する以外に仕方がなかったのであろう。この後、自宅に帰った Eula は、娘 Linda の名誉のために、Manfred との駆け落ちをやめて、自殺してしまう。Linda を心より愛する母親としては、こうするよりほかに道はなかったのである。この点に関しては、David Williams⁶、Sally R. Page⁷、Lyll H. Powers⁸、Paul Levine⁹などの批評家たちも言及している。

Gavin と Maggie に連れられて大学から戻った Linda は、あまりの悲しみに泣くことすらできないのであるが、彼女が Flem は自分の父ではないと思い、信頼する Gavin に真実をたずねると、彼は嘘と知りながら、“I swear to you then. Flem Snopes is your father.” (*T*, p. 346) と答えてしまう。母親を失って悲しみにくれる Linda に向かって、Flem は実の父親ではないなどと言うことは、Linda を愛する Gavin にはとてもできないことなのである。Gavin は Linda を安心させるために嘘をつくのであり、実際、彼女は Gavin の言葉によって安心し、心の落ち着きを取り戻す。

Gavin は何事につけ、Linda のためを思い、彼女の幸福を願って行動するが、Linda に対する Gavin の愛は、娘に対する父親のようなものではなかったかと思われる。8 章の中に次のような箇所がある：

So that girl-child was not Flem Snopes's at all, but mine; my child and my grandchild both, since the McCarron boy who begot her (oh yes, I can even believe Ratliff when it suits me) in that lost time, was Gavin Stevens in that lost time; and, since remaining must remain or quit being remaining, Gavin Stevens is fixed by his own child forever at that one age in that one moment. So since the son is father to the man, the McCarron fixed forever and timeless in that dead youth as Gavin Stevens is of necessity now the son of Gavin

Stevens's age, and McCarron's child is Gavin Stevens's grandchild. (*T*, pp. 135–136)

Gavin は、Linda の実の父 McCarron と自分を置きかえて、Linda は自分の子であり孫であると空想するのである。Linda が Eula と自分の娘であったらよいとの願望から生じた空想と言えるであろう。Gavin にとって、愛する Eula の娘は、自分の娘のように大切な存在であり、彼は、彼女にとって何が一番良いかを常に考えて行動すると言える。Eula が死んだ後、体面を重んじる Flem が Eula の墓に墓碑を建てることに決めると、Gavin は献身的にその準備に力を注ぐのであるが、それは、墓碑を建て終われば、Flem が Linda を手放すことがわかっているからである。Gavin はハーヴァード大学時代の友人に連絡をとり、Flem の手から解放された Linda を、ジェファソンの外の広い世界である、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジへ送り出す。

III

The Mansion においては、Linda はグリニッチ・ヴィレッジで知り合ったユダヤ人の彫刻家 Barton Kohl と結婚し、彼と共に共産主義者としてスペインの内戦に参加する。彼女は戦争で夫を失い、自分自身も聴力を失ってジェファソンに戻り、かつては Manfred のものであった館で、Flem と二人で暮らし始める。Gavin は、聴力を失った者特有の、あひるのようながあがあ声しか出せない Linda のために、彼女の発声練習の手助けをする。常に Linda のためを考える Gavin であるが故に、郡の弁護士という忙しい立場にあろうとも、彼女のために時間を費やすことはいとわないのである。FBI が Linda のことを調べ始めると、彼女のことをとても心配する Gavin は、共産党員の証明書を渡して町から逃げ出すように彼女に助言を与え、ニューヨークかヨーロッパへ行ってはどうかと勧める。その時、頼れる相手として Gavin しかいない彼女は、“I just must be where you are.” (*M*, p.238) と言って、Gavin のそばにいたいとの気持を表わすが、Gavin はとっさに、“*Its all right don't Be afraid I Refuse to marry you 20 years too much Difference for it To work besides I Don't want to*” (*M*, p.238) と、書いてしまう。この時 Linda は、Gavin がもう自分を愛してくれないのではないかと心配したにちがいない。彼女は、何とかして彼のそばにいたいとの思いからか、Gavin に自分の身体を与えようとするのである。しかし、Gavin は、Eula の申し出を拒絶したのと同じように、Linda の申し出を拒絶する。その時、Gavin は、Linda の眼の奥に、“immeasurable loss, the appeaseless grief, the fidelity and the enduring” (*M*, p.239) があるのを読みとる。この喪失感や深い悲しみは、Edmond L. Volpe が言うような、“her abiding love for Kohl”¹⁰ を示すものではなく、Gavin の愛を失ったと思う、Linda の心の悲しみを示すものであろうと考えられる。そのことに Gavin が気づいたが故に、彼は、“because we are the 2 in all the world who can love each other without having to” (*M*, p.239) と書き、自分たち二人の愛は、肉体関係を必要としないプラトニックなものだと主張するのである。Linda は20才近く年上の Gavin を男性として愛しても、Linda に対する Gavin の愛は、娘を思う父親の愛であり、彼は Linda を女性として愛することはできないのであろう。しかしながら、Linda にそのことをそのまま伝えて、彼女を悲しませることはできないが故に、Gavin は、二人の愛はプラトニックな愛だと言ったにちがいない。また、Gavin が Linda を女性として愛していないとすれば、彼が Linda と結婚する気がなく、彼女との肉体関係を拒絶しても不思議ではないと思われる。

やがて、彼女はカリフォルニアの飛行機工場働くことに決めるが、彼女のことを心配する

Gavin は、距離的にもっと近いパスカゲーラの造船所で働くように彼女に勤めると共に、現地での彼女の生活の準備にも心を砕く。これも、Linda のために思う父親のような彼の気持の表われと考えられるであろう。パスカゲーラで働き始めた Linda から手紙が来て、Gavin が彼女に合いに出かけた日の夜、Linda は、自分たち二人の愛はプラトニックなものであるという、Gavin の考え方を受け入れたかのように、肉体関係は重要ではないと言い、さらに、Gavin に自分以外の女性との結婚を勧める。その後、50才に近い Gavin は、未亡人で、広い土地を所有する Melisandre Backas Harris と結婚する。Melisandre の二人の子供はすでに成長して家を出ており、彼は義理の子供たちに気をつかうこともなく、二人で気楽に暮らせるのであるから、Melisandre との生活は、彼に安らぎを与えてくれるものなのであろう。それにしても、彼が結婚に踏み切ったのは、Linda が勤めたからであり、Gavin は Linda に対して忠実であると言えるかもしれない。

物語の終わりまでには、さらにまた、Gavin が Linda の望み通りに行動する場面が出て来る。Linda が Mink Snopes を刑務所から出すための請願書を作成してほしいと、弁護士である Gavin に依頼するのである。彼はこの Linda の行為は、“act of pity and compassion and simple generosity” (*M*, p. 391) であると考え、Mink が刑務所を出れば、Flem を殺すであろうと、思ってためらう。しかし、自分が断れば、Linda がどこかの新米弁護士に依頼して、多額のお金をしぼり取られることになるであろうと心配し、結局は引き受けることになる。その結果、Mink は Flem を殺し、間接的とはいえ、弁護士という立場の Gavin が、殺人の共犯者の役割を果たしてしまう。その上、Flem を殺した後で昔の家のあたりに潜んでいる Mink のもとへ、Linda に頼まれてお金を届ける役まで引き受ける。Linda のために思う Gavin の心が、彼を殺人の共犯者にしたと考えると、人間の運命は悲しいものと言えるであろう。後になって Gavin は、“So I am a coward, after all. When it happens two years from now, at least none of it will spatter on me.” (*M*, p. 376) と考え、自分の取った行動を後悔する。この彼の苦悩は、Joanne V. Creighton もふれているように¹¹、Faulkner がこの作品のはしがきにしたがいに書いた、人間の心の“dilemma”であると言える。また、人間の運命の悲しさと言えば、Linda が Mink の Flem に対する復讐心を知った上で、義理の父親である Flem の殺害を目的として、Mink を刑務所から出したという事実は、Linda を娘のように愛する Gavin にとって信じ難いことであり、それを知らされた時には、彼は彼女の運命の悲しさを感じないではいられないのであろう。それ故、彼は Ratliff に向かって、“I won't believe it! ... I won't! I can't believe it, ... Don't you see I cannot?” (*M*, p. 431) と叫び、涙を流すものと思われるのである。

IV

振り返ってみると、Gavin は「騎士」のように、Eula の貞節を、また、Eula 自身を守ろうと努力し、父親のように、Linda のために思い、常に Linda のために行動してきたと言える。自分の心の中に描いた、愛する女性の理想像をいつまでも守り続けようと、プラトニックに愛し続け、その女性の娘を我が子のように愛し、常にその子にとって何が一番良いかに心を砕いてきた Gavin は、極めて善良で、純粋な心の持ち主であると思わざるを得ない。現実を見逃すことも多く、自分を傷つけないと考えるような、性格の弱さのある Gavin ではあるが、その善良さと純粋さが Gavin という人物の魅力であり、甥の Charles も、“Maybe I was wrong sometimes to trust and follow him but I never was wrong to love him.” (*M*, p. 230) と語っているように、Gavin は愛すべき人物である。また、彼の善良さと純粋さは、Flem のように極め

て打算的な人物と対照してみたとき、より一層あざやかに浮かびあがってくると言えよう。

註

- ¹ William Faulkner, *The Town* (New York : Random House, 1957), pp. 133 – 134. 以後、この作品からの引用はすべてこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内に、作品名を示す *T* の文字及びその頁を記す。
- ² Cleanth Brooks, *On the Prejudices, Predilections, and Firm Beliefs of William Faulkner* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1987), pp.98 – 99.
- ³ James F. Farnham, “Faulkner’s *Unsung Hero* : Gavin Stevens,” *Arizona Quarterly*, 21 (1965), 119.
- ⁴ Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University : Class Conferences at the University of Virginia, 1957 – 1958* (Charlottesville University of Virginia Press, 1959), p. 141.
- ⁵ William Faulkner, *The Mansion* (New York : Random House, 1959), p. 241. 以後、この作品からの引用はすべてこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内に、作品名を示す *M* の文字及びその頁を記す。
- ⁶ David Williams, *Faulkner’s Women : The Myth and the Muse* (Montreal : McGill – Queen’s University Press, 1977), p. 217.
- ⁷ Sally R. Page, *Faulkner’s Women : Characterization and Meaning* (Deland : Everett / Edwards, 1972), p. 171.
- ⁸ Lyall H. Powers, *Faulkner’s Yoknapatawpha Comedy* (Ann Arbor : The University of Michigan Press, 1980), p. 230.
- ⁹ Paul Levine, “Love and Money in the Snopes Trilogy,” *College English*, 23 (1961), 201.
- ¹⁰ Edmond L. Volpe, *A Reader’s Guide to William Faulkner* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 1964), p. 338.
- ¹¹ Joanne V. Creighton, “The Dilemma of the Human Heart in *The Mansion*,” *Renascence*, 25 (1972), 42. (本稿は、1990年9月22日の日本アメリカ文学会中部支部例会における口頭発表に基づいている。)